

## 南足柄市立岡本小学校

研究テーマ：共に学び合う子の育成～集団づくりと授業づくりを通して～

### 1 実践の目的

令和3年の中央教育審議会答申では、「令和の日本型学校教育」の構築に向け、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげていくという、今後の方向性が示された。協働的な学びの視点を入れた探究型授業は、「学習環境」と「授業内容」の相互作用によって実現されるものであると考え、日常的な授業改善とともに、「友だちや学級」あるいは「教師」といった児童を取り巻く環境(学習環境)づくりにも力を注ぐ必要があると考えた。そうした経緯から、本校では、より良い学びを支える「学習集団づくり」と「授業改善」の両方に焦点を当てて研究を重ねていくこととした。

### 2 実践の内容

研究テーマを、「共に学び合う子の育成～集団づくりと授業づくりを通して～」と設定した。より良い集団づくりをめざす前者を「集団づくり部会」、協働的な学びを中心に授業改善を目指す後者を「授業づくり部会」の2部会制の研究組織とした。

#### 1 集団づくり部会(学級活動)の実践

学級活動(1)の話し合い活動を通して、次の3つの資質・能力の育成をめざす。

- 安心・安全な関係性づくり
- 相手意識をもって合意形成を図る
- 自治意識の醸成

(1) 必要感や相手意識のある議題設定  
議題を設定する際に、児童にとって「必要

感」や「相手意識」のある議題を設定することを大切にしたい。そうすることで、より自分事として考えられたり、相手の立場に立って考えたりすることができるようになる。それは、主体性や共感性を引き出すことにつながると考えた。

#### (2) 「実践」を意識した議題設定 ～「どのように」型の議題設定～

学級活動では、「話し合い」「実践」「振り返り」のサイクルを回すことによって、資質・能力の育成をめざすこととした。

#### (3) 話し合う視点(キーワード)の設定

相手意識をもって話し合うためには、どのような視点で話し合うのかを明確にすることが大切である。視点が明確であると、視点に沿って考える思考力を育てることにもつながると考えられる。



#### 2 授業づくり部会の実践

授業づくり部会では「読解力の育成」をテーマに進めていくこととした。PISA調査における読解力の定義をもとに、岡本小学校の実態や研究の内容に合わせて検討し、

①取り出す（自分の考え）

②交流（比較）

③自分の考えの再形成

の3つを読解のプロセスとして整理した。

また、国語科では、意見の交流を活発に行うため、「拡散・収斂型の授業」「3人指名」「ストップトーク」に取り組むこととした。

#### （1）拡散・収斂型の授業

学習者が問いをもつための手立てとして、初発の感想を問いに生かすことがよく用いられる。これを活用しやすいように、さらに構造化して行った。まず、ジャムボードに初発の感想や疑問を書かせ、次に児童の感想や問いを分類した。

#### （2）3人指名

自分の考えをもつことや意見の交流（比較）の際の手立てであり、3人まとめて指名し、意見をつなげやすくする。どの意見につなげてよいかが、基本は3人に限定されるので、何と比べればよいのかが焦点化しやすいという利点がある。また、発言をせず聞いている子にも「今の発言は似ていたか、違うか」を考えさせやすく、意見をつなげて聞こうとする姿勢を養うことができる。

#### （3）ストップトーク

「ペアで1つの話題について制限時間の間、途切れることなく話し続けさせる」という取組である。相手の考えを正確に理解したり、話題について深く話したりするために、比べたり、問い返しをしたりする。自分の意見をもつことができなかつた児童も、話す中で自分の考えをもつことができたり、友達に「なるほど！」と認められたことで、その後の全体共有の場面で、自信をもって発言することにつながったりしていた。

### 3 実践の成果

どの学級においても、ただ友だちの発言を聴くだけでなく、発言者の思いや意図を汲み取り肯定的な反応を示したり、発言に対して能動的に関わろうとしたりする姿がある。それは、学級活動を中心とした「集団づくり」と、他者との関わりを大切にした「授業づくり」の成果であると考えられる。また、学級活動で継続して取り組んでいる話し合い活動の手法や自治意識が、委員会活動や代表委員会などの児童会活動でも生かされる場面が増え、自治的な風土が学校全体に広がってきている。

国語を中心とした授業づくりでは、「拡散・収斂型の授業」「3人指名」「ストップトーク」を取り入れたことにより、児童は自分の考えをもち、他者とつなげ、改めて自分の考えを深めることができた。

### 4 今後の展開

児童どうしのあたたかな関係づくりを土台に、前向きに学習に取り組む姿が見られているため、今後はその「学習環境」を生かし、いかに児童の協働的な学びの質を高めていくかが課題である。協働的な学びの質を高めるためには、教師が小学校6年間の学びを見据え、系統性を意識して指導したり、児童の実態や発達段階に応じて適切に価値づけを行ったりすることが大切である。

また、「問い」の質を高めることも欠かせない。児童が、「友達と意見を交流したい」「どうにか解決したい」と思えるような「問い」があつてこそ、そこに協働の必要が生まれる。そして、その必要感をもとに「問い」を友達と解決する体験を繰り返すことで、少しずつ学びの質が高まっていくと考えられるため、問いづくりにもこだわっていききたい。